ISSN 1346-2601 (Print)
ISSN 2436-5408 (Online) 2024 年 12 月 25 日公開

長江家旧蔵資料の紹介（３）
――染織関連文書

佐藤弘隆（愛知大学地域政策学部）
E-mail　hrtk310@vega.aichi-u.ac.jp
加茂瑞穂（武庫川女子大学文学部）

1.　染織関連文書の概要

京都市下京区新町通仏光寺上る船鉾町に所在する長江家住宅には、住居や商売、家族、町内などに関する様々な文書資料が残されている。長江家は代々呉服関連業に従事していた。本稿は、立命館大学 ARC に寄贈された長江家旧蔵の文書群のうち、下絵や図案、色見本など、染織業に関連する資料について紹介する。

建物が市の有形文化財に指定されている長江家住宅では、建築の調査は進められていたが、生業に関する調査はほとんど行われていなかった。そこで、2018 年 3 月に共立女子大学家政学部教授（当時）の長崎巌研究室と ARC 客員協力研究員の髙須奈都子氏を中心とする研究プロジェクト「京都を起点とした染色技術及びデザインのグローバルな展開に関する研究」のメンバーによる調査が実施された。本稿の執筆者である加茂は、そのプロジェクトメンバーとして参加しており、佐藤も協力者として現地調査に立ち会った。本調査によって、下絵、色見本、小紋見本、図案集、注文台帳など 54 点について基礎調査とデジタル化が実施され、幕末から明治・大正期にかけての貴重な資料が含まれていることが判明した。

なお、ARC の文化資源ポータルデータベースには、その後に発見された資料を加え、2024 年 9 月時点で 61 点の染織関連資料のアーカイブ画像が閲覧できる。

2.　幕末・明治初期の資料

『当世新型更紗染』（ngeSA-001）は、紺青や黄土、赤茶など色鮮やかな草花文様の更紗の染見本が紙に摺られ、見開きに四枚または八枚ずつ貼付されている（図 1）。それぞれの更紗には「九拾九」まで番号がつけられ、裏表紙には「新町　大坂屋伊助」と所有者の名前が書き込まれている。長江家では、5 代目の当主まで代々「大坂屋伊助」を名乗っていた。京都市の文化財保護課が実施した過去帳の調査の記録によると、5 代目当主は、弘化 4（1847）年から明治 7（1874）年までの間を生きていた。すなわち『当世新型更紗染』は、五代目以前の当主の所有物であり、少なくとも幕末・明治初期を下らない時期の図案帳ということになる。

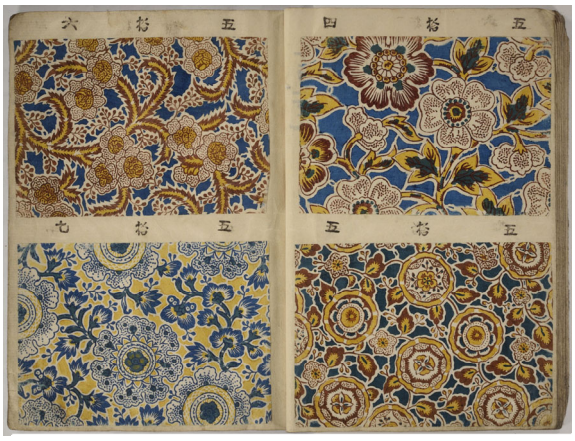
図 1 『当世新型更紗染』（ngeSA-001）

図 2 「紋帳」（ngeSA-011）

また、同時期の資料と推定されるものに、3 冊の「紋帳」（①ngeSA-011，②同 012，③同 013）がある。そのうち、①と②の裏表紙にも「大坂屋伊助」の名前が記されている。これらの「紋帳」は、着物の発注を受けた顧客の家紋を記録したものだと推測される。年代が確認できる最も古い記述は、①の「嘉永五年子八月五日　佐藤権八様　八ツ星源氏車　鯨尺壱寸弐尺」（図2）であり、安政 3 年頃までの顧客の家紋が記録されている。そして①に続いて、②では万延・文久年間、③では慶応年間から明治初期の顧客の名前と家紋が記録されている。

ここで特筆しておきたい点は、①～③を通じて丹波方面の顧客が目立つことである。例えば、丹波亀山藩主の「松平紀伊守」や亀山藩の御用商人で後に実業家の源太郎を輩出した田中家、源太郎の妻の出身で庄屋の垂水家は、複数記録されており、得意先であったことが伺える。また、馬路村や保津村、河原尻村などの郷士らの名前・家紋も数多く記録されており、立命館大学の創始者である中川小十郎の叔父にあたる百助の名も見られる。さらに、将軍後見職・禁裏御守衛総督として上洛し、当初一時的に馬路村の郷士らと協力関係を結んだ一橋慶喜とその家中である飯田利郎の名前と家紋も記録されている。

前述の過去帳の調査によると、初代の大坂屋伊助は、正徳 2(1712)年に丹波亀山で豆腐屋を営む家の生まれで、24 歳の時に京都へ出て来て、小川通三条上ルに家を構えたという。この頃から京都で仕入れた反物を丹波に売り歩くという商売をしていたようで、3 代目と 4 代目の伊助も丹波の須知村からの養子であった。そうした繋がりが丹波方面への顧客を増やしていたものと考えられる。

裏表紙に明治 4(1871)年の年記がある「松印竹印極当世頗新模様帳控」(ngeSB-008)は、植物や動物、山・川など、様々な模様の手描き図案が 48 図収録されている。この裏表紙の蔵書印には「新町綾小路下　悉皆染物所　大坂屋伊助」とある。また、小紋の型見本を 100 図以上収録した『い印』(ngeSB-002)も、裏表紙に「京都新町綾小路南　長江伊輔」と記されているため、共に 5 代目が晩年の仕事に用いていた図案帳だと考えられる。

以上の資料からは、幕末・明治初期の長江家の仕事の全容を説明することはできないものの、5 代目の大坂屋伊助が「悉皆染物所」として、丹波方面の様々な身分の顧客から多様な発注に対応していたことが少なからず伺い知れる。

3.　明治・大正期の資料

6 代目当主の長江伊三郎は、明治元(1868)年の生まれで、幼くして家督を相続した。しばらくは、母親の「はる」が店を支えてきたが、伊三郎が 18 歳の時に「染呉服卸商」に転じて、自ら業務を取り仕切り、店を大きく発展させた [1)]。

『嘉印』(ngeSB-004)は、肉筆に彩色された裾模様の雛形が描かれる資料で、一番から五十番まで合わせて 50 図が収録される。裾模様は風景や動植物が多く、鶴亀や菊、松など典型的な題材が取り上げられている。なお、裏表紙見返しには明治 32(1899)年の年記が入っている。また、同じく裏表紙見返しには「本長江商店　誂方」、裏表紙には「染呉服卸商　長江伊三郎商店美術課」とあることから、誂えの業務を担当する部署が存在していた様子がうかがえる。

「綴」(ngeSG-01-001)は、表紙に「帯模様／妻模様／打惣模様／腰熨斗目／袱紗もやふ／四身裾もやふ／綴」とある。きものの半身あるいは背面(図 3)、羽織の背面が描かれたものもあり、目的が明確な図案もあれば、全体に模様が描き込まれるものもあるため、はっきりとした用途が判明しない図案も綴じ込まれる。おそらく表紙に記載された品物用に描かれた図案であろうと推測される。綴じ込まれた図案は、部分的に彩色がほどこされるもの、具体的な色名を直接書き込んだ指示書きがのこされるものも確認できた。全体として、江戸時代の雰囲気を踏襲した意匠が多い。

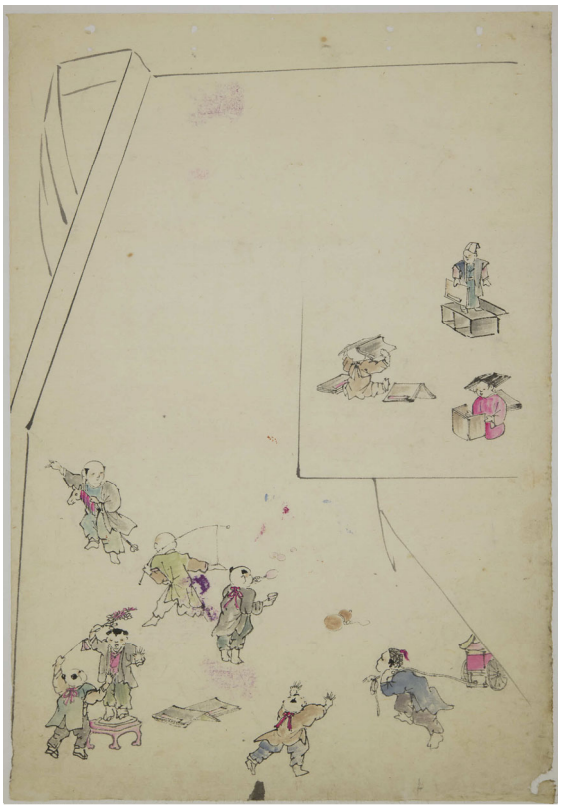

図 3 「綴」(ngeSG-01-012)

また、長江家には肉筆だけではなく明治期に出版された図案集も所蔵される。こうした図案集は明治 20 年代頃から京都の芸艸堂を中心に美術・工芸に向けて刊行され、図案教育機関や呉服店など関係者を中心に意匠の参考資料として活用された。

長江家に残された図案集に明治 32 年刊行の『天年模様鑑』シリーズ(ngeSA-002・002・014・015・016)がある。海外天年は万延元(1860)年に生まれた画家で [2)]、明治 30 年代に図案集を手掛けた。木版多色摺で天年のアレンジが加えられた意匠は、業務上の参考資料として活用されたのであろう。このほか、同じく明治 32 年刊行『はながた』シリーズ(ngeSA-006～009)などが現在まで保存される。長江家に残された図案集はいずれも、きもの背面の全体図や裾模様、羽裏(羽織の裏)を掲載した図案集が残されているため、直接業務に関わりのある図案集が選択されたと推測される。また、図案集の裏表紙等には「長江商店美術課」「長江商店染方」とも記載されていることから当時の業務展開が垣間見

える。

4. 原寸大下絵

「下絵」（ngeSG-02）は、きものと推定される原寸大下絵 20 枚がまとめられている。複数のきもの下絵が部分的に残されたようである。すべて肉筆で、鶴や植物などさまざまな絵が描かれ、一部は彩色されている。鶴が描かれた下絵（図 4）については、下絵と類似する幼児のきものが長江家住宅の蔵から発見されている [3)]。今回の調査では、図 4 を含む 4 枚が現存していることを確認した（ngeSG-02-009・010・011・012）。下絵はあくまでも制作工程で一時的に使用されるという性質上、完成品よりも残される可能性が非常に低い。そのため、下絵の存在は制作の工程や実態を示す貴重な資料であるといえよう [4)]。

以上のように長江家旧蔵の染織関連資料は、幕末から明治・大正期までの山鉾町界隈における呉服関連業の業務展開の一端を知るための資料として貴重であり、今後一層の研究利用や展示活用などが期待される。

図 4 「鶴の下絵」（ngeSG-02-011）

［注］

1) 武井啓治郎 編『織物要鑑』,東京信用交換所大阪支所,大正 7. 国立国会図書館デジタルコレクション https://dl.ndl.go.jp/pid/950513 （参照 2024-09-17）

2) 川瀬鴎西 編『古今書画名家全伝』続編,東雲堂明治 36 年,国立国会図書館デジタルコレクション https://dl.ndl.go.jp/pid/850536 （参照 2024-09-20）

3) 立命館大学 ARC 活動報告 https://www.arc.ritsumei.ac.jp/e/report/b1/pc/cat1585/index_2.html（参照 2024-09-23）

4) 下絵に関して『三井家のきものと下絵』文化学園服飾博物館, 2009 年を参照した。